意思決定力の育成をめざした社会科授業構成

ー仮の意思決定を導入部に位置づけた試みー

上之園　　強

1　社会科で重視したい自分で決める場

「自立に向かう子どもたち」は，学校教育（教科教育，道徳，特別活動等）や家庭・地域社会との連携のなかで，総合的に育まれていくものであると考えている。ここでは社会科教育に限定して，サブテーマ「自分で決める場」との関わりで述べていく。

社会科教育が重視する自分で決める場は，次の2側面であるととらえている。

① 社会科教育の目標である民主的・平和的な社会の形成者としての公民的資質に係わる「社会的判断」の側面，

② 社会科授業そのものを，子どもたちが主体的に行っていく「自らめあてや方法を決めていく」側面，

①の「社会的判断」の側面については，「自立に向かう子どもたち」を育成していく上で，重要な要素であると考えている。自立に向かう人間は，物事を自分で決定し，遂行し，さらに新たな目的に向かって自分を高め，自分を確立しようとしていく。そのためには，様々な場面での判断が不可欠であり，その判断が深い程，より確かな自分の確立につながっていくと考えている。

社会科においては，目標である公民的資質を，「民主的･平和的な社会の形成者として，社会に主体的に働きかけていく実践的な能力や態度」ととらえるが，そのような能力や態度の育成には，「社会的判断」は不可欠のものであり，公民的資質の基礎をなすものである。[1)]

②の「自らめあてや方法を決めていく」側面は，子どもたちが主体的に学習を行っていく自己学習力にかかわるものである。自立に向かう子どもを育成する上でどの教科でも必要とされる基礎的な能力である。学習への興味・関心の喚起や，その持続を図りながら能力や態度を培っていくことが必要とされる。

したがって，社会科では，子どもたちが自己学習できる授業構成を基盤にすえて，その中で，主体的に社会的判断を行う場を設定していくことが「自立に向かう子どもたち」に向かっていくと考えている。それは，どんなに社会的判断を子どもたちが行っても，それが受け身であるならば，自ら考えたものにはならず「自立に向かう子ども」の育成にはつながっていかないと考えるからである。

本実践では，社会的判断の一側面である意思決定に焦点をあて，意思決定力の育成をはかる試みを述べてみたい。

2　社会科における意思決定力とは，

意思決定力とは，次のような能力であるととらえている。[2)]

> 意思決定力とは，問題場面での自己の行為を科学的な事実認識と反省的に吟味された価値判断に基づいて選択・決定するために必要な能力であり，目的・目標を達成するために，あるいは問題を解決するために考えられるすべての解決策の中から，より望ましいと判断できるものを選択・決定することのできる能力である。

3　意思決定力の育成にあたって

意思決定力を育成していくためには，どのような授業を構成すればよいのであろうか。それは，前述したように社会科授業に子ども自身が主体的に意思決定する場を位置づけ，意思決定を実際に経験することによって培われていくと考えている。そのためには，教材が社会的な意思決定を引き出すものでなければならないし，学習過程が子どもの主体的な意思決定に向かうものでなければならない。以下，教材構成と学習過程の視点から述べていく。

(1)　具体的に意志決定できる教材構成

素材とする社会的事象や事物には，個人・集団・組織体が直面している判断の分かれるような問題や価値観の違いによって解決策がわかれるような社会的論争問題を含むことが必要である。[3]それは，判断の分かれる社会的事象に出会うことによって初めて，子どもたちは意思決定をしていくことの必要性を感じると考えるからである。しかしながら，素材そのものでは内容が難しすぎたり，社会的論争問題を感じとることができないことが想定される。そこで素材の教材化にあたっては，社会的論争問題を子ども自身のものにするような工夫をしておくことが必要である。

本実践では，社会的論争問題を含む社会事象・事物のなかで，子どもにより身近で具体的に考えることのできる内容を位置づけ，子ども自身がその状況に立つことができるような教材構成をおこなってみる。このような考え方に基づいた，授業構成の重点をまとめると以下のようになる。

＜意思決定力を育成する重点の１＞

子どもにより身近で，具体的に考えることのできる社会的論争問題を単元に位置づけ，子ども自身がその状況に立つことができるような教材構成を行う。

(2)　より深い意思決定に向かう学習過程

意思決定は，主体的に行われていくことが必要である。そこで，学習過程を次のように組織していく。子ども自身が主体的に学習に取り組んでいくことのできる「めあて追究の過程」[4]に「意思決定の過程」を重ね合わせていく。

意思決定は，単なる思いつきによる判断でなく，社会的論争問題の事実やその背景，判断の分かれるそれぞれの考え方などを吟味した上での判断とならなければならない。

そこで，意思決定の基本的な過程[5]を以下のように考え，児童の実態に応じた過程を工夫する。

①問題把握　②問題分析　③達成すべき目的・目標の明確化　④すべての実行可能な解決策（行動案）の提出　⑤解決策の論理的結果の予測と評価　⑥解決策の選択と根拠づけ　⑦決定に基づく行動

本実践では，とくに，めあて把握の段階で「どうしたらよいか」という問いを設定し，子ども個々に「仮の意思決定」を行なわせる。そして，その意思決定を児童相互に検討していくことを通して，確かな意志決定をしていくためには，どのような問題のなのか，なぜその問題が生じたのかという問題の把握や問題の分析が必要であることに気づかせていく。

そして，子どもたちが事実や背景にある価値観を調べていく活動をおこなった後に，再度「どうしたらよいか」と問い，意思決定を深めるという展開を試みてみる。つまり，単元の導入部と終末部に「どうしたらよいか」という問いを位置づけて，二段階による意志決定力育成の展開である。

このような展開をとるのは，小学生がいきなり何を調べたら社会的論争問題の解決策が見いだせるのかと考えるのは難しいと考えているからである。小学生が意志決定を深めていくためには，自分なりの素朴な考え（仮の意志決定）を出しあい，その出し合いの中で，不確かさに気づいたり，あるいは，新たな考え方に触れる場面が必要であると考えている。そのことが契機となり，より確かな決定を求めようと意欲的になったり，そのために必要な問題把握や問題分析を深めていこうと

するのではないかと考えている。このように仮の意思決定をきっかけとして，意思決定を深めていく学習展開を図で示すと以下のようになる。

＜意思決定力を育成する重点の２＞

めあて追究の学習過程を基盤にして，その学習の導入部「どうしたらよいか」という仮の意志決定を位置づけそのことの確かさを求めていく学習過程を設定する。

意思決定力を深める学習過程

めあて追究の過程	めあての設定	追究 ＜追究１＞ 個人での自力追究	追究 ＜追究２＞ 集団を通した追究	めあての達成・発展
意思決定の過程	問題把握	問題分析 解決策の提出 論理的結果の予測と評価 解決策の選択１次		解決策の選択２次
子どもの活動 意識	仮の意志決定 自分の現時点で考えを仮の決定として持つ （自分の決定は，これでいいのかな？）	問題の背景や様々な立場や考え方を知る （いろいろと調べて，確かな決定にしよう）	第１次の決定 調べたことをもとに自分なりの決定をする 自分なりの決定を相互に出し吟味する （みんなで吟味しよう）	第２次の決定 自分で調べたことや他者の考えを参考にして決定を修正・深化する （よりよい決定にしよう）
教師の支援	・焦点化した場面設定 ・「どうするか」の決定を問う発問	・方途の示唆，試行錯誤の容認， ・時間的保障	・決定の深化を促す発問や場づくり， ・新たな資料の提示	・現時点で最良と考える決定を促す段階的発問や場づくり

＜注＞

1）溝上泰「価値の主体的選択と社会科教育」『社会科教育』明治図書，№101，1973。

2）小原友行「社会科における意思決定」社会認識教育学会編『社会科教育学ハンドブック』　明治図書，pp170，1994。

3）小原友行，上掲書，p172。

4）拙稿「自ら学ぶ意欲の育成と持続をめざして－追究過程にひとり学習と集団学習を位置づけて」広島大学附属東雲小学校『個がいきる授業』　PP33-35，1989。

5）小原友行，上掲書，pp170-171，1994。

4　意思決定力の育成をめざした実践事例　　第６学年単元「ペリー来航と明治維新」

(1)　単元のねらい

○　ペリーの開国要求に対してどう対応したらよいか，当時の状況やその後の世の中の変化を考

えて自分なりの判断をすることができる。

○　開国以後の社会の変化に関心を持ち，意欲的に追究することができる。

○　わが国は，開国以後，西洋諸国に追いつくために富国強兵，文明開化の方針のもと，諸改革を進めていったことを理解することができる。

○　わが国の歴史や国民生活に対する基礎的な資料を効果的に活用したり，事象の推移を読み取ることができる。

(2)　意思決定力を育成する工夫点

①　教材構成の工夫点

歴史授業において，意思決定を引き出す教材としては，歴史上の人物が直面していた歴史的論争問題を取り上げることが考えられる。そして，当時の状況で自分なら「どうするか」と問い，その答えを子ども自身が見いだしていく学習を構成していくことが必要である。ただし，ここで考えておかなければならないことは，歴史上の論争問題は，その結果がすでにでているということである。子どもが意思決定したことと実際の歴史の事実は，異なることもある。そこで，子どもが意思決定した後に実際の歴史の事実を提示し，自分の考えと比較して，なぜそのような意思決定をしたのか，その決定の後，世の中はどのような変化をしたのかをみて，改めて意思決定のあり方を考える場が必要である。このような学習が，子どもたちの将来に生きる意思決定力につながっていくと考えている。

ここでは，その論争問題として，「ペリーの開国要求」を取り上げてみた。

ペリー来航と開国は，小学校でよくおこなわれているが，その扱いは当時の歴史的状況の理解を主たる目標としている。そこで，本実践では，ペリー来航と開国を「自分ならどうするか」という意思決定を主とする学習として構成する。そして，この学習で培った開国要求に対する自分なりの解決策をもとにしながら，歴史上の事実である開国とその後の世の中の変化をみていく学習を構成する。

このような考え方に基づいて単元を次の３つのまとまりで構成する。

第一次は，ペリー来航と開国要求を取り上げ，自分なりの解決策を意思決定する場とする。また，自分の決定と比較しながら，開国とそれ以後の世の中に関心を持つ場でもある。
第二次は，開国後どんな世の中に変化するのか明治政府の諸政策を中心にして理解を深める場とする。
第三次は，開国を選んだ日本について，開国以後の世の中の変化をまとめ，子どもなりに評価し，今後に生かす場とする。

②　学習過程の工夫点

子どもたちが意思決定を行っていくためには，子どもたちなりに決定できる具体的な場面を絞り込んで設定することが必要である。本実践では「開国か攘夷か」答えに迷う老中に焦点をあて，ペリーが浦賀に来航し，武力を背景に要求した場面を位置づける。

学習展開としては，児童が意思決定を無理なくおこなっていくことができるように，また確かな状況把握に基づいたものとなるように，「自分が決断を迫られている幕府の老中ならばどうするか」と問いかけ，子どもたちが仮の意思決定を行う場を設定する。そして，仮の意思決定を相互に吟味しあうことを通して，自分の意志決定へのこだわりや自分の意志決定を確かなものにするために，当時の歴史的状況や背景を調べることが必要であることに気づかせていきたい。

このような考え方に基づいた単元の工夫点は次の通りである。

意思決定を無理なく，しかも確かな状況把握にもとづいたものにしていくために，単元の導入部で「自分が決断を迫られている幕府の老中ならば，どうするか」という問いをおこない，仮の意思決定を行う場面を設定する。

③　単元構成

意思決定を育成する教材構成と学習過程の工夫に基づいて単元を次のように構成する。

第一次開国を求められた幕府 (3)	ねらい	○　ペリーの開国要求に対してどう対応したらよいか，当時の状況やその後の世の中の変化を自分なりに考えて，意思決定をすることができる。 ○　開国以後の社会の変化に関心を持ち追求する意欲を持つ。
	内容	・ペリーの開国要求に対する幕府の様子と自分なりの仮の対応策。 ・対応策を確かにしていくための，当時の状況の把握。 ・自分なりの対応策の決定と開国以後の様子への関心をもつ。
第二次開国以後の世の中の動き (3)	ねらい	○　わが国は，開国以後，西洋諸国に追いつくために富国強兵，文明開化の方針のもと，諸改革を進めていったことを理解することができる。
	内容	①明治政府の諸政策を調べる。 ・五箇条の御誓文，廃藩置県，四民平等，富国強兵，文明開化 ②明治政府の諸政策の不備を調べる。 ・急激な変化や不備
第三次開国と明治維新への考え (1)	ねらい	○　開国を選んだ日本について，開国以後の世の中の変化をまとめ，自分なりに評価し，今後に生かす。
	内容	・開国以後の世の中の変化への意見。

(3)　実践の概要

実践の概要については，第一次の開国を求められた幕府に絞って述べてみたい。

①　ペリーが来航し，開国を要求したことを知る。

この場面では，歴史上の人物が意思決定を求められた様子を知ることがねらいである。したがって，様子をとらえやすくするためには，いつ，どこで，誰が，何をし，どのような状況であったか明確に示すことが大切である。そこで，次のように進めてみた。

幕府が鎖国を続けて200年くらいたった1853年，江戸の近くの浦賀に，アメリカ合衆国のペリーが来航したことを年表と地図で提示する。また，当時のアジアの状況として，鎖国を続けていた中国が，戦争によってイギリスの植民地になっていたことを，香港返還の新聞(1997,7 授業実践の年が香港返還の年であったため）を提示し触れておく。

ペリーの目的や動揺する幕府の様子については，浦賀に来航した絵を提示し，子どもたちにじっと見つめさせた後に，「ペリー来航の絵をじっと見つめていてどんなことが心に浮かんできましたか。」と問いかけてみた。

子どもたちは，絵をもとに次のような気付きを出していた。

・幕府はあわてている，戦いの用意をしている。

・ペリーの船は，大きく大砲を積んでいるが，日本の船は小さく手でこいでいる。

・弓矢で戦うことができるのか。

子どもたちが素朴な気付きや疑問を持ち，ペリー来航の様子に関心を持ち始めたところで，文章資料を提示し，ペリー来航の目的，黒船の規模と様子，動揺する幕府や江戸の人々の様子をおさえていった。

②　開国の要求に対して，仮の意思決定を行う。

子どもたちが，ペリーが開国を求めてやって来たこと，幕府がすぐに答えを出さずに一年伸ばしたこと，諸大名にどうするか相談をするほど動揺していたことをつかんだところで，次の発問をおこない，現時点での意思決定（仮の意思決定）を求めてみた。

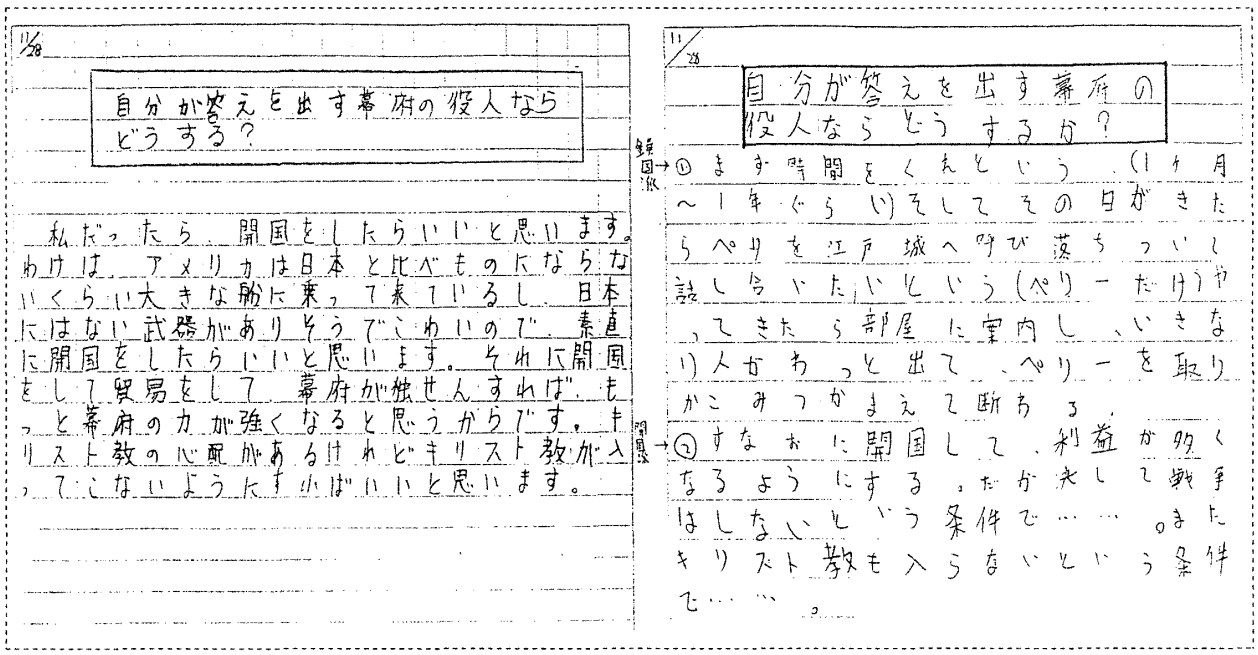
> このような（状況）時，自分が答えを出さなければならない幕府の役人なら，どうするか。今の自分ならどうするか，考えてみよう。

ここでは，歴史的状況を十分とらえている状態ではないが，現時点での自分なりの解決策を持つことが大切であると考えている。それは，不十分な考えであっても，自分の考えをつくろうとすることが，主体的な意思決定につながっていくと考えているからである。そこで，子どもたちの考えを引き出すために次のような点に留意した。

・一人一人の考えを引き出すことができるように，考える時間を十分に確保する。

・自分の考えを広げたり，整理したりできるように，考えをノートに書く場を設定する。

子どもたちの考えの一例を示すと次のようになる。


11/28
自分が答えを出す幕府の役人ならどうする？

私だったら、開国をしたらいいと思います。わけは、アメリカは日本と比べものにならないくらい大きな船に乗って来ているし、日本にはない武器がありそうでこわいので、素直に開国をしたらいいと思います。それに開国をして貿易をして、幕府が独せんすれば、もっと幕府の力が強くなると思うからです。キリスト教の心配があるけれどキリスト教が入ってこないようにすればいいと思います。

11/28
自分が答えを出す幕府の役人ならどうするか？

鎖国派→①まず時間をくれという。（1ヶ月～1年ぐらい）そしてその日がきたらペリを江戸城へ呼び落ちついし話し合いたいという（ペリーだけ）やってきたら部屋に案内し、いきなり人がわっと出て、ペリーを取りかこみつかまえて断わる。

開国派→②すなおに開国して、利益が多くなるようにする。だが決して戦争はしないという条件で……。またキリスト教も入らないという条件で……。

③　仮の意思決定を発表しあい，互いに吟味する。

子どもたちが自分なりの解決策をつくったところで，発表しあうことにした。ここでは，現時点での解決策（仮の意思決定）を出し合い，互いに吟味することで，解決策の幅を広げたり，解決策を確かなものにしていくための必要事項を明らかにすることをねらう。そこで，次の手順で行った。

(1)自分なりの解決策を発表しあう。

(2)それぞれの解決策について，賛成か，反対か，よくわからないかの意思表示を行う。

(3)それぞれの解決策ごとに，賛成なのはどうしてか，反対なのはどうしてか，よくわからないのは，どうしてか，その考えをだしあい吟味する。

(4)自分なりの解決策を改めて考え直す場を設定する。

(5)確かな意思決定をしていくためには，何を調べておかないといけないか考える。

子どもたちの解決策は，大きくまとめると開国か鎖国を続けるかに分かれたが，その方法は部分的な開国であったり，時間をかけた開国や鎖国などであった。子どもたちの考えをまとめてみると次のようになる。

開国する 条件付き（時間をかけて，一部の港で　等）	30人	・武力の違い，戦いをさけたい ・乗っ取られるから条件を ・鎖国の遅れを取り戻す
知らんぷりしてわすれてもらう。	1人	・どっちもこまる
開国しない　話し合って，時間をかけて 戦って追い返す	3人 1人	・キリスト教が入って崩れる ・貿易の利益が独占できない

発表の後に，それぞれの解決策について，賛成か反対かの理由を出し合って，その理由に対して意見を言い合うことにした。また，意思表示できないという場合もその理由を出し合うことにした。

子どもたちの吟味のなかで，意見の対立がみられた一例を示すと，次のようになる。

（鎖国）　開国すると幕府の政治の仕組みや貿易の利益が失われるので，幕府は，このまま鎖国を続けるべきだ。
（開国）　断って，大砲で脅されて戦争になったらまけてしまい，国ごとなくなるのでその考えはおかしい。
（鎖国）　そんなに，アメリカは軍事力があるのか。あるとはらない。断っている間に，幕府も軍艦とかつくるから大丈夫だ。
（開国）　ペリーの船からだけでも，力の差がわかる。香港の例もあるので大変だ。

④　意思決定のために何を調べ，どのような手順で考えるか見通しを持つ。

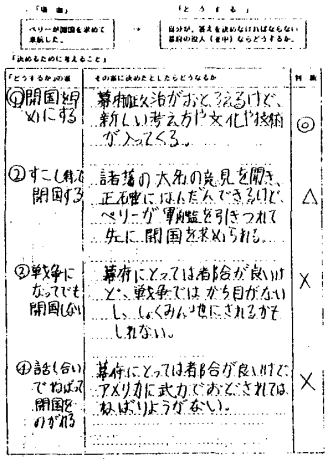
上記のような意見の言い合いをしている中で，よくわからないことはっきりとしないことがわかってきた。そこで，意思決定をするためには，何を調べておかないといけないか問いかけてみた。子どもたちは，そのころの日本の状況(幕府の政治力や人々のくらし方)，アメリカの国の力，日本以外の国の諸外国とのつきあいなどを上げてきた。そこで，これらを調べることを確認し，改めて意思決定することをこれからの学習とした。

また，子どもたちは吟味をすることで，「○○にすると○○になることもあるので，反対です」といった解決策とその解決策を取った場合の予測をして，策を決めることに気付き始めてきた。そこで，意思決定していくためには，このようなプロセスを踏むことが必要であることを，次の意思決定カードを提示し，確認していった。

＜どうするかを決めるために＞
①状況をつかむ→②いくつかの案を考える→③その案を選んだらどうなるか考える
→④どうするか考えた案のなかでよりよいものを決める

⑤　調べて自分なりの意思決定を行う。

何を調べるか，またそのあとでどのようなプロセスを踏んで意思決定をしていくかを確認し，右記の意思決定プリントを配付して調べていくことにした。なお，調べる内容の難しい点については，要点だけを示したプリントを用意していくことにした。



⑥　他の考え方も参考にして，自分の意思決定を行う。

解決策を出し合い，決定した理由を互いに述べあって，他の考え方を参考にする場を設ける。そして，その後に再度自分の意志決定を行うようにしてみた。このことは，調べたことやその解釈が独りよがりにならないように，また，決定が狭い範囲で行われることのないようにしたものである。

解　　決　　策		発　表　時	吟　味　後
開国する	すぐに	9人	26人
	ゆっくり	25人	11人
	地方の港で,	10人	0人
開国しない	ゆっくり話し合って	2人	0人
	戦って追い返す	1人	0人

⑦　自分の意志決定と歴史上の意思決定と比べる

学習後，全員の子どもたちが開国の道を選んでいた。そこで，歴史上の決断を示し，「幕府は，開国の道を選んだが，みんなが考えているような良い面がでてくるのか，その後の世の中を見ていこう」と関心を持たせる問いかけを行った。

(4)　考　察

考察は，次の2点から子どもの学習後のアンケート結果とノート記述をもとに行ってみた。紙幅の都合上，要点のみ述べてみたい。

A　初めて行った「どうするか」を主たる問いとする意思決定学習をどう受けとめているか。

B　導入部に仮の意思決定を位置づけた試みはどのような効果がみられるか。

Aについて

- またやりたいという傾向がみられ，大きな抵抗のない学習であったと考えられる。
- 子どもたちは，学習の意義として，意思決定を行った人物の立場に立てること，またその立場から世の中をみることができ理解が深まることを上げている。また，自分が直面したときに役に立つととらえている子どももみられる。このことから，意思決定の授業は人物が問題を解決していく能力育成に関わり，授業構成の工夫によって小学校でも実践していくことができると考えられる。
- 問題点としては，調べる学習の時間と内容のバランスがとれておらず，自分の判断をするには不十分であったこと，子どもの学習の構えを十分とらえきれておらず，一人一人に対応しきれていないことが考えられる。

Bについて

- ほとんどの子どもたちが，仮の意思決定を出し合うことを望んでおり，その理由として解決策の幅や考え方が深まること，調べることが明確になることを挙げている。また，学習への意欲が高まることも挙げている。このことから，意思決定を無理なく，しかも確かな状況把握にもとづいたものにしていくという意図は，ほぼはたされていると考えられる。
- 問題点としては，子どもの学習のスタイルをとらえてきれていないこと，仮の意思決定を行う意図を子どもたち十分伝えていないことが考えられる。

①どうするか型の学習をまた行いたいか。

とてもやりたい	12人
やりたい	18人
あまり	5人
ぜんぜんやりたくない	0人

○やりたいわけ（自由記述）

・当時の人々の気持ちになれる。の立場からみていける。	12（人）
・当時の状況が印象強くなる。	9
・考えが身に付く	3
・考えが変わることがわかる。	2
・似た出来事に出会ったとき役に立つ	2

○あまりやりたくないわけ

・よくわからない状態で考えを出すのは，難しい
・短い時間で多くの資料から自分の意見をつくるのは難しい
・考えをだすより，調べる方がわかる。

②とりあえずの意思決定を出し合って学習を進めたほうがいいか

出しあった方がいい	32人
しなくていい	3人

○出し合った方がいいわけ（自由記述）

・考えを増やしたり，深めたりできる	13（人）
・何を調べるかはっきりする調べるよりどころができる	11
・最後に考えが深まってくる	5
・最初の考えと後の違いがわかる。（深まり，不十分な点など）	5
・自分の考えの正しさをいいたくてやる気がでてくる	2

○しなくていいわけ

・とりあえずの考えを出すと多くの人の方に流されてしまう。	1
・まず調べてからでないと考えにくい	2